32

癌国際連携の機運と歩み

河原ノリエ
国立がん研究センター／UICC 日本委員会

「歴史にはその形態の原基があり，それが歩みを支配する」これは，「吉田肉腫」を発見し，実験腫瘍学に新たな扉を開いた吉田富三の第 50 回日本病理学会総会での会長挨拶である．吉田は 1966 年東京で世界癌会議を開催するなど，UICC 国際対がん連合の発展につくしたが，UICC のその成立の歴史には，先人たちの，癌に対する国際的な意見交換の場の定期的開催の必要性を促す機運のたかまりとなっていく歩みがあった．癌についての専門の病院や研究所が欧米の都市部にできはじめたのは 19 世紀末といわれているが，癌に対する国際協力の価値の認識は一体どのように形成されてきたのか？という問題意識のもと，その歴史と意義について，資料をもとに考察をする．

世界において近代医学の概念の大枠ができたのち，日本においても病理学を中心として，世界の動きとも連動しておりウィルヒョウ，アショフ，レスレのもとで学んだ明治の先人の信じがたい勢いによって，世界をリードし多くの領域を越境させながら発展していった．山極勝三郎らが「実証」の段階に進み，一つは「発癌実験」へ，もう一つは「腫瘍の形態と構造，命名と分類」へと発展していくのが流れの大もとであるが，特にこの時代は日本人によって発癌研究を中心に，医学，癌研究が広範に行われた．19 世紀おわりから 20 世紀にかけ生物学と医学の新しい時代の始まりは癌の組織病理学の集中的な研究に促され，精緻な命名法をめぐり意見交換がはじまり，ドイツにおいては，組織的な会議開催が続いていく．第一次世界大戦で欧州の医学研究が中断された時期に山極の成し遂げた業績は 1922 年のアムステルダムの会議では大きく取り上げられ研究者が国際的な会議をもつことの重要性を広く共有するにたるものであった．

その後第一次世界大戦を機に，サイエンスの世界においてもドイツ批判が強まり，癌の国際連携の中心はドイツを離れ，1926 年のニューヨークでの会議において，新たな組織づくりが模索され，1928 年ロンドンにて，社会課題としての病と職業病についての議論もなされ，新しい組織としての UICC の準備会合として 15 か国が参加で行われた．1933 年最初の会議がマドリッドで開かれ翌年から国際組織設立のための規約が準備された．世界は対戦に突入するが，第二次世界大戦後，西欧の癌研究はこの UICC を中心に進展することになる．1962 年，東西冷戦は雪融けとなり，ソ連，東欧が UICC に合流し，モスクワで Congress が開催され，1963 年にはドゴールが防衛予算の削減によって生まれた資金による癌研究の立ち上げを呼びかけ，このイニシアチブがきっかけとなり，UICC との協力のもと，1965 年，IARC が設立され「環境発癌仮説」の検証がはじまっていく．1966 年東京において，UICC Tokyo Congress が 3000 人の海外参加者を含む 4000 人規模で開催され戦後日本で行われた国際会議の中では最大のものとなった．この学会をきっかけとして，日本の癌研究も政府の癌研究費も，大きく前進していく．また UICC のフェローシップは多くの新進気鋭の研究者の海外留学を可能にし，日本の癌研究の進展と国際化に多大な貢献したのである．